



第三の世界

猿橋庄太郎

元学長大下角一先生がユニークな可能性を残しつつ地上の生涯を終えられてから早五年の年月が過ぎた。先生のキリスト教への深い洞察と温い社会観を背景とした学識のゆえに、その講壇で、神と社会と人との視界の相互性を示唆される思いがした。先生はある時、オーティス・ケーリー教授

随 想

の訳書『米国史に於ける皮肉』にふれて、三つの世界を話題にした。第一の世界は公式的な世界、そこでは他人を己の便宜の対象としてみる社会、あるいは義人必賞、悪人必罰の社会、すなわち物的、功利的な世界である。第二は家族や友人等を中心とする私的世界、そこでは、幸福には共に悦び、苦難には慰藉を与える世界である。第三が神との清い交に生きる世界である。昔ヨブと言う義しい人が引つづく災禍に見舞われて、第一と第二の世界に在る限りの幸福・財産・尊敬・子女・健康・友情のすべてを失ってもなお、神を呼び求め、神との信頼関係を守り通した。その処を第三の世界と観る。『大下教授・説教論説集』に、先生が「わたくしには信仰による人生以外に人生はあり得ない」と言うとき、先生が第一と第二の世界を功利の世界と否定的に評価しつつ、第三の世界を目標として、いならむしる第三の世界のみをまっすぐに走り去った牧者の本質に想い到るだろう。

存在が神から見離されたものでないことの慰め、最後は、許されたものへの激励の祝福から成っていた。

ある色紙の揮毫に「神と共に働くものなり」と言う句と下に小さく大下の署名のあったことを想う。先生の講説が充分毒舌でありながら、親切な勧告、同労者としての思いやり、ほのぼのとした余韻を感じさせるものであった。

昭和三十年四月同志社大学入学式々辞に「勉強せよ」と述べた。教授たちは講義内容の幾十倍の準備をして教室に臨むものであるから、学生がただノートだけして学習効果の上るものでない。学ぶためには充分事前学習をして来て欲しいと強調したのは大下学長であった。同年南大阪教会創立三十年記念礼拝に「前に向いて」と題して、信仰はただ与えられるものでなく、信ずるためには「信ずる努力が必要である」ことを教えたことを思う。

厳しい学者と愛にみちた牧者の画面を合せみようとて妙なエピソードさえ思い起こす。書斎の先生の椅子には一匹のペルシヤ猫がいて、客がすすめられるままに客が

坐ろうとすると「これは先生の座だと言わん許りに睨まれたもので、その猫と先生の交感の深さを感じたものだ。壮図寮には、学生に飼われた別の猫がいたが、その猫を学生は「かくいち」と呼んで、先生の説教の講義・演習の厳しさに呼応するがごとくであった。お宅を訪問してその猫に睨まれた学生のなせる技でなかったらうか。

(高校教諭・社会)

勝利への道

原 忠明

大正八年の盛夏酣なわの頃。

同志社中学は、朝日新聞主催の全国中等学校優勝野球大会の京津予選で武運に恵まれて優勝を成し遂げた。予選に参加以來五年目で、初めて優勝旗を手にした快挙であった。それは団結の力であった。

その年の同志社中学の野球部は、優勝が出来るほど強力なチームではなく、誰もそれを期待してはいなかった。むしろその前

年のチームには、個人的に秀れた技量の持主が多く、また打撃と守備の調和がよくとれて居り、同志社の関係者や一般の市民からは優勝するだろうと期待されていたが、不幸にも同志社人の通弊である脆さが禍いして、到頭優勝を飾ることが出来なかつた。

夏期休暇が始ると同時に、われわれは直ちに猛練習に入った。キャプテンの三宅君それに上級生の大仲、三木、吉井、浅井の諸君に小生が加わって、一応合宿の運営に關しては自治の体制を採ることになったが、もちろん練習の日課は野球部長の前澤先生や速水先生、それにコーチ格の平井先輩たちの手で組まれた。

技術面のコーチとしては、同志社中学の先輩であり、当時慶応大学の野球部のキャプテンであった高須一雄氏を招き、打撃、守備、走塁の基本はもちろんのこと、慶応式のきめの細かい野球の会得に明け暮れた。炎天の下で、コーチと選手とが一つになつて、猛暑と闘いながら大会に備えた偉い出は、今でもよく堪え忍んだものだと思われるながら感心する。

英語の先生であり、野球通であつた速水先生は、君たちは同志社の選手らしく

「カム・オン・ボーイズ」

「メーク・ア・ヒット」

など、掛声はすべて英語でやりなさいと、当時としては珍らしく精練さを主張されたので、選手たちは夜は夜で野球英語を憶えるのに回転の鈍った頭に管うつたのであつた。

優勝戦は京都の雄京都一商との間で行われた。優勝戦までに立命館中学、宮津中学、それに京都一中とそれぞれ比較的にな戦いを続けてきたが、さすが優勝戦では苦闘を強いられた。記録の上では安打数が五本に対する八本、失策数が七ケに対する五ケ、三振の数が五ケに対する三ケといずれもわが方に不利であつたことでも察せられるように、団結の力だけがわが方に勝利運を呼び込んだのであつた。当日、捕手の三木君が急病で倒れ、止むなく篠原君が代役を務めることになった。われわれは倒れて後止まんのみと誓い合つたが、篠原君がその日どのように活躍したか全く印象に残っていない。

全国大会は八月十三日から鳴尾競馬場内の特設球場で開始された。

同志社は諸戦で最優勝候補の一つである盛岡中学と対戦することになったが、結局最終回到盛岡中学の生内のサヨナラ・ヒットで敗れた。しかし四対三のスコアであったことを考えると、よく戦ったものだとも思う。試合は雨のために二時間中断された。三回の裏に三点を許した同志社は、この中断で元気を回復して、後日、早大の投手となった下山投手を攻略して三点を跳返し、八回に同点としてなお勝越しの走者を擁していたが、小生の投手ゴロで走者を迎え入れることが出来ず、それが敗戦に繋がる原因の一つとなった。

しかし今でも残念に思うことは、投手ゴロを打つ前の球が傾合の外角の高目の直球であったことで、その球を見送った直後シマッタと強い衝撃をうけたことを今でも憶えている。もしバットが素直に出ておればそして打球のポイントが練習の時と狂いかなければ、打球は右中間に飛んでいたことだろうし、試合の帰趨は予断を許さないものがあつたと考えると残念でたまらない。

戦終つて競馬場のスタンドに集合した選手一同が、涙で目を潤ませながら再優勝を誓い合つたことがついで昨日のように思われる。しかし優勝候補のチームに善戦したという慰めで、選手一同の気持の上でいくらかの余裕と心の奥底にすつきりした爽かさを与えていたことは否めない。五十年経過した今では、スタンドに腰を下して青空を見詰めながらお互に慰め合つた情景が、遙か彼方の出来事として親しみのうちに他人事のように憶い出される。

(大9中卒・神戸女学院財務部長)

雑 感

後藤 富枝

「きょう、幼稚園でマグマ大使の歌を皆で歌つたよ。太鼓やタンバリンも使つてね。ぼくが指揮したんや、ぼくだけしか知らんしね。先生が、上手やねつてはめてくれたよ。」

五歳を過ぎた頃から、子供は毎日のよう

に作り話をまことしやかに話しはじめた。麻疹の友だちに秘蔵のミニチュアカーを持つてお見舞に行くと、オバQのパジャマを着た友だちが喜んでくれたこと。六段の飛箱越えがほんの少しのところで失敗して残念だった話。

嘘か本当かとまどう事しばしばの話に泡をくつていた私も、話を貫ぬくものが、強い子になりたい願ひであること、その願ひの切実さが、話の中の自分自身のイメージを実にリアルに創り出す根源であることが解つた。弱虫で消極的な子が、いまその殻から脱皮しようとしているのだ。その頃から彼は、チビッコ集団に参加しはじめた。山の石置き場はボクラの基地、ダンボールはマジックに塗られ、穴があけられタンク、宇宙船、野獣狩のボートに千変する。そして、わが家のものでない言葉がいりこみ、彼の行為と心理のリズムは私のそれと異なる波長を示しだした。彼は、今、一年生である。校門の前で怒つたような表情で消えていく姿は、痛いほどの緊張を語っている。もう作り話はしなくなつた。そして「もう子供じゃない。少

年だ。」という。作り話時代から芽生えた彼の意欲は、ようやく、親から独立した彼の人生の第一歩を創りはじめたようである。

私は、親としてのこの体験を通じて、私の前の一人一人の生徒が、かつてこうあったことを、そして、今も内在しているにちがいない成長への意欲とそれ故の可能性を理念としてでなく、その子のもつ熱い願いとして重みとして感じることができるようになった。それと同時に、意欲を徐々に喪失させるもろもろのもの、中でも、今その是非が論じられている「相對評価」の方式について考えさせられるようになった。相對評価は、それが能力の絶対的な評価ではない、もちろん人間への評価などでは決してないと、いかに力説されようとも、一度示された数字は、全能力の客観的評価であると錯覚させるに十分な魔力をもって迫る。そのうえ、他人と比較して「1」であるという以上、劣等感を持たない方がむしろ不思議であらう。

いま、本校でも評価法について衆知を集めた論議がなされている。よりよい方法が

考え出されるにちがいない。しかし、どんな評価法にも、能力の格付けという、本質的に教育的でないものは伴うだろう。それをこえて、生徒の一人一人が自分を誇り、自分の成長を確信できるような教育の場が作らねばならぬことを切実に感じる。

親は、わが子の存在自体を愛する。教師にそれを要求するのは無理だとしても、一人の生徒は、他人と比較して評価される存在ではないこと、自分の人生を生きようとしている独立の人格であること、その一人一人の人生の重みをしっかりと受けとめていかねばならぬと思う。

自分の子供がそんな先生に出会えるように、そして、私もそのような教師になりたいと願うこと切なこの頃である。

(女子中・高校教、園遊)

自然との対話

尾関 岩二

私はすでに七十歳を超えました。少年時

代は一年一年成長して行くことを自分も親達も楽しんでいましたが、その同じ自然の時間が私を老いさせて行くのです。これが運命です。人は明日の自分を知らないで、今日を暮しています。しかし、求めると求めないにかかわりなく、明日は昨日になつて行き、また新しい明日が待ちうけているのです。

私はいま、私の生れた故郷の自然の中で静かに一生を終るつもりです。家は小さな溪流に臨み、緑の山に対して建っています。家とはいっても私たち老夫婦が寝食するだけの小さなものですが、それでも毎朝鶯が歌います。ほととぎすもうるさいほどになき続けます。

山を見ていると、一年の過ぎて行く姿が緑の濃淡にも、日の照りかげりにも読みとることが出来ます。

家の前には、田圃があつて、人たちはこの貧しい山田を耕すために時々姿を見せてくれます。小川で一時も釣糸をたれると小さな魚が五六匹はつれます。老妻と二人の夕の食膳はそれだけで豊かになります。

ふきとか、みつばとか、春早くにはわら

びなど山菜もさがせば見つけるに困難はありません。秋の山には、松茸こそできませんが、味のよいずいたげというものがあつて、乾しておけば、年中の副食物に香を添えます。

私の生涯はいそがしいものでした。

父に「大学」と「十八史略」の素読を教わりはじめた五歳の頃から、人間の教養を積むために転々となりました。その途上でいろいろな人に会い、いろいろな教を受けました。

ミス・ウエンライトから「新約聖書」を教わりました。同志社に学んだのも、それが縁となりました。

同志社では、よき師友を持ちました。文学・哲学など、人間が現在まで積み重ねて来た文化遺産の大きさを知ったのも同志社時代でした。そして一生を児童文学に捧げる決心をしたのもこと時代なのです。

私は同志社を出てからは、マスコミの中で働き通しました。私自身がマスコミ的人物ではないことを意識しながら、それでも子どもや家族を扶持するためには、一日も働かすにはいられなかったのです。

その中で、私は書を読む楽しみを知りました。そしてまた、アルバイトのような形で、作品を書いて行きました。おかげで私はマスコミ的な人間になることだけは避けられました。マスコミ的人間というのは、自分が自分以外の人間になることです。自己を喪失した人間が、そこらにうようよしているのを見ると私が、どうか純粹な自分を守り通して来られたことを自分に感謝したくなります。

私は今私の過去をふり返って見て、残ったものは何十冊かの著作と、その折々に書きためたり、発表したりした一箱の原稿の他になにもありません。

私は、パンのためではないこれらの著作を支えてくれた少数の読者に対して、限らない親近感をおぼえます。これが物を書く人間の最大の喜びでしょう。

今、私は、頼まれてある大学の講義を何時間か受持っていますが、それも負担になるよりも、人間と交わる一つの機会として楽しくやっています。その他の時間を、私は自然との対話で明け暮れています。

山といつても、ここは有名なアルプスな

どという山ではありません。地図で見ても百五十メートルから二百メートルまでの低山です。それでも、山は山です。

人がこの山荘を訪ねて来ることはまことにまれです。子どもや孫たちが、ときどき訪ねてくれますが、そうした時には、都会の騒音が流れこんで来る感じになります。淋しいながら、私は自然に対して、物をたずね、または自然に語りかけるのが一番私らしい生きかたであるようです。

農業のために、昆虫などの生物がほろびて行くといわれ、今年は蜜の保護などが問題となりましたが、ここでは、とんぼも、蛭も、蛙も何もかも昔のまま生き残っています。

ある夜ふと目をさますと、蜜が部屋の中を飛んでいるということもたびたびです。夜でも、カーテンをひいただけで、錠をかけるということがありません。自然は盗みを働かないからです。

しかし、自然はいつもやさしく、親切だというわけではありません。

颱風などが襲来すれば、山も竹藪も一斉にうなり、吠え、猛り立ち、屋根の藁を吹

きとばし、庭木を吹き倒し、稲を押し伏せ
ます。私も納屋を倒されて困ったことがあ
ります。

大雨がふれば溪流はたちまち濁流の渦と
化し、葦や笹を押しふせ、時によっては田
圃のあぜさへ漕って行きます。

そのような天変地異の時でさえも自然は
対話の相手になってくれます。

むかしの聖賢はこんな自然の猛々しいこ
とばの中から、天啓のささやきを受けとめ
たものと思われます。
テレビやマスコミは人間を自然との対話

出 発

馬 場 力

△中学校教諭・技術▽

野に遠く街の灯揺るる夕暮れを地にしたたるか月赤あかと
青雲の思いに遠きちちははの愛を憎めど月近く照る

つねにわれの胸底にそよぐ旗青しもりあがりくる海のなかの島國
人混みのなかりがたくいる夕べ冷ややかな視線をひとつ待ちつつ

わが影は確かにわれのものとして店頭の青き灯を過ぎりたり
黄の花をかざしてわれの見たるもの父の柩のいまも野を行く

夜の広き遠景のなかへ銃▽持ちてわが行くあとを追う母を見き
抱き合うふたつの影にそよぎたる樹林よ天を指すには低し

夕映えを仰ぐロゴスよ影長く曳きて愛など語るすべなく
よろいたるもののかたちよみみずみすと葉の光る徑のわれとわが影

背後よりわれをののしる者の声とあるときは街の雑踏のなか
放たれしけもののがいただよわせ改札口よりわれの出発

から押しのけようとして映像を送りこんで
来ています。道がよくなって、自動車の排
気ガスもただようようになりましたが、そ
れでも私は自然との対話の中に生きつつけ
て行くでしょう。

山の中の暮しでは、自然のほかに対話の
相手がありません。

自然はいつでも、問に答えてくれます。
人間のように意地悪くそっぽを向いたり、
心にもない嘘をついたり、ごまかしたりす
ることがありません。

自然は、友だちであり、教師であり、恋
人であり、人間のすべてです。

この原稿を書いている時、硝子戸の外で
はもう鶯とほととぎすが妙なる朝の合唱を
楽しんでるのです。

(大9大英卒・岡山女子短大教授)

あ の と き

林 彰

二十余年前の夏のことだった。奥地の作

戦司令部で、およそ人間らしい感情を忘れて三年目の軍隊生活をむかえたばかりはある日突然に、日本の降伏を知ったときもほとんど無感動のままだった。おそらく、ぼくら兵士の表情は能面のように動かぬかたにちがいない。そういう日常に慣らされてきたために、格別強烈な敗北感も湧かなくなつたし、まして解放のよろこびなども、ぼくらにとっては無縁のものだった。

しかし、しばらくたつて、ぼくらの命運があと一日で尽きるのを悟ったとき、体のなかを風が吹き抜けるような虚脱をぼくは全身で味わつていた。ぼくの内部で何かが萎え、何かが崩れ落ち、ぼく自身の存在の感覚ですら急速に喪なわれていった……。この記憶は、今日でも時折、なまなましく甦えつてくる。

かつてぼくは、凄絶な戦火のなかで、多くの肉体が天空に四散する情景を、いくどか想像しないうちはなかつた。そんなギリギリの瞬間まで、ぼくを支えてくれるものがあることを、一途に信じないわけではなかつた。……だが、いまとなつては、それはいったい何だというのか。

ぼくは、うつろなところに、なお銃剣を握りしめて、カマボコ型の兵舎の方へと歩いていった。

明朝未明敵軍上陸ノチハ最後ノ一兵マデ戦イ軍司令官ノモトニ玉碎セヨ

先ほどからの噂が雑かな声となつて、ぼくの耳にもとどいてきた。

月明の夜だった。草いきれのかすかに残る凹地にたつてぼくは一瞬、「逃亡」の想に憑かれ、慄然とした。どこへ、どのよう

に脱出するのか……。二十二歳のぼくは、目くるめくほど生への執着を感じていた。少なくとも、こんなふうにして死にたくはない。いや、絶対に死ねない……。数時間後に迫つた厳然たる死の事実もはや、ぼくに何の充足感、何の意味も与へはしなかつた。ぼくにとつて「死」は、たとえはしつかつた大地を踏まえたときの、あの決断に満ちた「生」の重量感そのものであるべきだった。このぼくをいささかも欺くことのない、もつと豪華な精彩と緊張と榮光に溢れた終焉のはずだった。

ぼくはみずからの錯乱を断ち切ろうと、伝令の任務にあえぎながら峻険な山道を駆け

けてゆき、やがて、疲れはてた。ふと目覚めたときぼくは、銃を胸におし当てたまま崖っぶちの附近に横たわっているのに気づいた。夜はしらじらと明けそめていた……。

あれは、遠い日の現実だったのだろうか。それとも、一夜の夢魔のおとずれに過ぎなかつたのだろうか。ぼくは、いま一度あの木立の草いきれのなかにたちつくしてちようど八幻化Vの主人公のように、ぼく自身を、確認しなければならぬ。ときどきそうした衝動を強く感じるのだが、なぜかまだ実行できないでいる。

あれ以来、現実と幻想の間を絶えず揺れ動くぼくは、成熟の途上で、いわば「根こぎ」にされた世代の一人である。あの日から、説明しがたい何ものかの欠落の意識を逃がれることのできない世代の一人なのである。遠藤周作氏のことばを借りると、ぼくらの「慢性疲労」のありようは、まさしくあのときにはじまると思われる。

(昭24大英文卒、香里中高教諭、英語)

デギタリス

楳垣 実

チャペルの東側にキコクの垣をめぐらした植物園があつて、いつも美しい色とりどりの花の咲いているのが見えた。加藤延年先生が珍しい植物を集めて、ところ狭しと栽培されていたもので、わたしは中学の一年か二年のころ、植物学の時間に、たった一度だけ、この植物園にはいることを許され、外からのぞいてみると違ったその立派さに心をうばわれたことをよく覚えてゐる。

どういうわけか、そのとき、デギタリスという、当時は薬草として知られていた背の高い茎に袋のようなかっこうの赤紫色の花をたくさんつけた植物を見て、それがいつまでも印象に残った。この *dicentra* は、英語では「きつねのてぶくろ」(*foxglove*)と呼んでいることは、たぶんそのときか、または教室かで、加藤先生から教えていた

いたものにちがひなく、そのこともこの花をいつまでも忘れない原因のひとつだろう。

あの花の形を見て、すぐ手袋を思いつかべることは、われわれ日本人にとっては、そう容易なことではない。人間の手のかっこうは世界中どこでも変りがないのに、それにかぶせる袋ということになると、各国民それぞれ違ったアイディアが生まれてくる。

それはともかく、ラテン語名のデギタリスというのは、*digits* から出たものらしく、「ゆび」「あしゆび」のことだという。

どうやらドイツ語の *Fingerring* 「ゆびの帽子」という名が、実物とともにローマに持ち込まれ、それを訳してデギタリスになったものらしい。そうしてみると、ドイツでは「手袋」ではなくて「指帽子」だったということになる。ところが、古い書物などをみると、デギタリスのことを「狐尾草」とも書いてある。この名は中国語から借りたものなのか、それともわが国でつけたものなのか、どちらともよくわからないが、どうも、デギタリスの花のひとつひとつを

観察したうえでの名ではなく、高い茎にむらがつて咲いたあの花全体の感じを「きつねのしっぽ」と表現したものでらしい。そんなに考えてみると、草花に名をつけるというちょっと考えるとなんでもないようなことでも、それを観察する人のイメージの作り方、そのイメージをどう表現するかというアイディアの違い、そんな点から、まったく違った名が生まれてくるのだろう。

中学生のころ、はからずも覚えた「きつねの手袋」という俗名から、この花はわたしの一生忘れられないものとなった。そして、加藤先生を慕うわたしの気持も、年とともに加わるばかりである。わたしが教師のはしくれであるため、その気持にはいつそう切なるものがある。教えていただいたことのうち、デギタリスという草花の名だけしかおぼえてはいないが、それでも、先生的人格にじかにふれることのできたしあわせは、わたしの生涯の星となつてわたしを導いてくれるだろう。わたしは新居の庭に、いちばんにデギタリスを植えることにした。

(大12大英卒・帝塚山女子大学教授)